

東日本大震災から丸3年

# “情報、入らなかった”



当時を語る渡辺氏



市消防本部に設けられた災害対策本部では、市職員が情報を集め、発信した= 2011年3月

## 渡辺前市長にインタビュー

### 復旧はおおむね予定通りに

東日本大震災、原発事故から丸三年。復旧・復興は緒に就きつつあるが、被災者、避難者らを含む市民の本格的な「生活再建」は、まだまだ遠い。

未曾有の大災害が発生した三年前、いわき市長の任にあった渡辺敬夫氏（六八）は、本誌とのインタビュー（一月末）の中で、「当時、まったく情報が入らなかったが、できる限りのことはやった。ひと息つけたのは、あの年の秋、十月ごろだった。しかし、ヨウ素剤の問題には悔いがある」などと振り返った。

渡辺氏はさらに、「復旧はおおむね予定通りになりつつあると思う。今後は、復興のため、一市民として市、県の発展に努めたい」と語った。

# ヨウ素剤問題では悔い

## 日産のC・Gーン氏に感謝

——四年間の要職、お疲れさまでした。振り返ってみていかがでしたか

渡辺 私が表示していた公約についてはほぼ実現できたと思っっている。例えば、「人づくり」「市立総合警成共立病院の建設問題」など懇談会を設置して方向付けをした。

私の政治信条は「ぶれない」「スピード」であり、この公約を踏まえ、やってきたし、市が抱えていた課題にしていたものについては、ほぼ遂行できたと思っっている。

### 認識不足の職員処分

——任期の後半に発生した大震災、そして原発事故のダブル惨事。に対しては

渡辺 「千年に一度の災害」、前例がない事故だったので、惨事体制をとらなければと考え、全職員に招集をかけて対策に踏み切った。すぐに市の消防本部に災害対策本部を設置したが、情報が混乱して二、三日の体制機能

の遅れはあった。とにかく情報が錯綜（さくそう）し、それで著しく混乱したことは確かだ。

——市職員全体の動きはどうでしたか

渡辺 なにしる大災害だし、高齢者や独り暮らしのお年寄りなどへの対応もあり、市長名で全員に非常招集をかけ、惨事体制を敷いた。こんな時だったから。

しかし、残念ながら一部には、大惨事を理解、認識できないような職員もいたようだ。後日、そうした職員は文



書で懲戒に踏み切った。内容は減給、戒告、訓告などだった。五、六十人は処分したと報告を受けた。

——ご本人は当初、どのような動きでしたか

渡辺 対策本部に入り、三月十一日から十日間は、詰りっぱなしで自宅に帰ることもなかった。その後、夜間は二人の副市長と交代で行った。ただ、先ほども言ったように、発生後しばらくは、震災の件も、原発についても情報はほとんど入らず、だった。国も県もさっぱり適切な情報をよこさなかった。

——対応が遅れた、と指摘された原因はその辺にもあったようですね

渡辺 例えば、大津波によるガレキの問題だが、国や県に連絡しても埒（らち）がわからない。さらには、復旧のための予算措置が一年遅れに

なった。我々（われわれ）が用地を確保して津波被害者らための公営住宅建設をしようとしても、「まかりならん」だった。

前線の事情が理解できないにもかかわらず、「認めない」のが上部組織の意見という状況だった。常磐・関船町の公営住宅は、場所が市の土地だし、震災前に決まっていたので早くなっただけ。震災後、私に対するいろいろな中傷、批判、ご指摘があったが、出来る限りの手は打ったと思っっている。

### 船舶での避難計画も

——安全神話、がもろくも崩れての原発事故。誰もが憂っています

渡辺 原発については私自身、これまで多少なりの知識は持っていた。だが、あの事故、放射線に対しては正直、さっぱり動きがわからず、苦労した。これもほとんど情報が入らなかつたから。

そんな中だったのが、事故の発生直後、職員に避難計画を作成してもらい、三月十二日の夜、三十キロ圏内の久之浜・大久の住民約五千八百人には、常磐に避難してもらった。

# 「目うつろだった菅首相」

——そのほか、他地域の避難計画も作ったようですが

渡辺 県サイドと打ち合わせをして、四倉全域と平の鉄北地区合わせて四万八千人を対象としたプランも作り、船舶での避難、脱出も考えていた。

渡辺 官邸へ出向き、菅直人首相にも直接会い、現状を訴えもしました。だが、その時の首相の目はうつろだったんだ。そんな状態だったので、我々の話がしつかり耳に入っただろうかは大いに疑問だったね。

三月十五日に、情報がない中で私が判断、決定して十七日から対象者への配布を始めた。乳幼児には粉にして飲ませなければと思っ、一般の家庭で使っっているしょう油の容器を利用してと思っ、集めたりもした。そして、配布は各区長さんに依頼した。

ただ、この件は、国、県からの指導や情報もまるでない中でのことだった。今考えれば、飲んでもらうべきだった。悔いは残っっている。

### 発生後のロスが響く

——震災後、丸三年目を迎えました。今の現況、どうみますか

渡辺 いろいろあったが、復旧事業に関してはおおむね予定通り出来つつあると思っっている。岩手や宮城など他県からみれば、福島、いわき地域は進んでいる。復興については、市民の皆さんの「本格的な生活再建」という点ではまだまだだろうが、平成二十六、二十七年途中には……

原発関連も含めてだが、これらについては発生後、およそ四十日も上部からのこれといった情報がなかつたこと。このロスが今も響いている。日数があまりにも長かつた。



放射性物質による汚染は各地に広がり、3年を経た今日も各地で除染作業が行われている＝山と積まれた行き場のない汚染土（楢葉地区）

——在任中の出来事で印象に残ったことは？

渡辺 ダブルの惨事で、市内の大手企業などが続々とわきからの移転を計画しているといった情報が流れた。

そんな折、日産のカルロス・ゴーンさんがいち早く「ここ、いわきで復興を目指す！」と、新聞紙上で語っていたのを読み、勇気づけられた。私自身、あの言葉で「必ず市の復興を」ということに自信、確信を持った。あの言葉はありがたかつた、勇気づけられたね。

——ご自身の今後については

渡辺 うーん、今は暇なので農業をしたり、たまには仲間たちとゴルフをしたり。いづれにしても、これからは一市民、一県人として復興のために持っている力を尽くしたいと考えている。

### ▼渡辺敬夫氏プロフィール

1945年12月25日、生まれ。日大法学部卒。市議(2期)、県議(5期)、県議会議員。平成21年秋、第7代目のいわき市長に就任(1期)

※関連記事、三十九ページに掲載

### ■インタビューを終えて

「あの日は家にいたのに、「市長が逃げた」と、変な噂(うわさ)を立てられてしまった……」。一見、強面(こわもて)の渡辺さん、目を細め、思い切り相好を崩しながらの笑顔で、真相を語る。渡辺さんとの初対面時は、市議と新聞記者という肩書のこと。もう、三十年近くも前だ。この人、裏表がない。誤解される点もなくはないもの

の、気は優しく、正直。市長在任中は、震災対応に對し、批判の声も上がり、また、相双地区民といわき市民の軋轢(あつれき)問題など難問も統出。だが、自らを信じ、黙々と職務をこなしてきた。今は、在野の人々となつたが、これまでの経験を生かし、まだまだ市、市民のため努めてほしい。(G)